

参列の氏子の主だつたものも捧げ奉るが、分なりながい祭儀にしむれをきらしている人たちの中には、玉串と捧げたまま神前に大きな音を立てて、バタとたおれ、箱を神前に供えたような形を演ずる。まことに大醜態である。しむれとはしむれをきらす、しむれがされたなどい、長座の脚など一時血の運行が止まつて感嘆を失い、足が死んだようになつて、動作がすべてわからんようになつてゐる。所々のお祭にも時々此の演出があり、今に話の種に残つて居る。

城あとの老松の樹の間はほろと桜散るなり
春告げ顔に

昨日の四月五日、藩祖高政公の従三位贈位の祭典に参向された久米大分県知事、才左毛利家当主高兼公も、今日此の鎮座祭に御臨席をされていたが、祭典がすむとお二人ともフロックの膝をさすり、顔見合せて哄笑をされた。お二人ともシビレをきらして居たのである。まさかこけるようなへまはしなかつたけれど。

甬来毛利神社へ例祭は十月十七日、は城山山頂に神威いやくに神鎮りまして、街の人々の崇敬いともあつたが、昭和二十年（月日忘却）アメリカカの飛行機に爆撃されて炎上した。奴さん軍事施設があるとみなされたらう。あとには石の祠を建てたのであるが、当時佐伯に於ける毛利家のこと一切を掌つて居て、「お家の忠臣」とニックネームを貰つて居た片岡老人が、
「無茶なことをする奴等が多くてこまる。祠をひつくりにかえしていたづらをするのだから。」
とよく憤慨されていた。

その毛利神社は、今だに再建されておない。今や神社

は宗裁法人となつて、市なんか世話することが出来ない。矢筈会などが世話するとよいかだけれど。佐伯市は今日よそもんの町となつてゐる。山鹿素行の言つた「耕さず、漁らず、紡がず」で、殿様の礼抱えであつた藩士の子孫は、祭神の縁も忘れてしまつてゐるのではないか。
(おわり)

研究

勇士 寺島 大 学

—— 猪と山伏とほら貝 ——

会員 山 田 善 市

大友興廢記によると、大友宗麟公は弓箭の御行の餘日に、狩場の御遊興折々であつた。

天正二年四月十五日には佐伯へ出向、佐伯紀伊公惟教は御説を承つて諸準備をし、十六日及び十八日島嶼に鹿五百頭を打ちとり、又十七日には考嶽の麓で鹿二百三頭を仕止めてゐる。翌十八日には蒲戸崎で四百八十頭の狩をし、廿日には久部、堅田兩所で御鷹狩を行つた。

同年秋には津久見山で笛野と云う狩をする。鹿笛の名手をせんざし、佐伯惟教に申付て佐伯永木の六郎五郎と云う鹿笛の上手を呼びよせ、宗麟公の案内をさせた。六郎五郎が笛を吹き、宗麟は矢頭を知らせて鹿を打つと云う趣向である。

同三年四月には野津山で狩をし、同四年には津久見の山に云うところを狩をした。この年のことである。佐伯惟教の家来寺島大友が、荒れ狂う大猪に乗び乗り、大友義統公見物する前では留めて、養れをあげたのであつた。

大友興廢記の猪と山伏とほら貝の語句は、

「同四年丙子の四月十日の日、宗麟公、義統公津久見
 御門、廣末與左衛門、寺嶋大學、廣末源亮、此等獵
 に相心得るるに依て、津久見へ差遣はさる。其時大
 の猪御鹿垣へ出る。義統公遊ばす。され共矢一筋に
 て留まらず。後射手を出し射る。矢疵二つ貫ひ、怒
 て人とかげ倒し牙を鳴らし、息荒くおれていきまふ。
 氣怒り、象の牙にこそ方らざりけれとよみしも、家
 に理りなり。」

爰に、佐伯惟教の侍、寺嶋大學と云ふ者、つとと飛
 付き、猪の首に抱きつき、十間程、猪に引かれて乗
 り移り、しかり毛に取つく。猪いよゝ怒り、尾を
 越へ谷を過る。河野三左衛門、廣末與三左衛門杯相
 取を拵むとする。大學御前なれば、一人にて取べし
 と云ふに、只だ見物して傍たり。大學脇差を以
 て遂に突留む。西人にやかへせ御前へ参る。
 御兩殿、四郎忠綱以來の手杯と御雜談なされ、御感
 成からず。金子持領して帰る。」

私共の小学校時代のある事である。讀本にのつていた。

頼朝公、富士の養育の時、手負の猪御大將に向つて
 かけ下る。家来のものどもこれを見て、おれよおれ
 よと打ち騒ぐ。仁田の四郎忠常は荒猪めかけてえい
 やとばかり後向に飛ぶのりさし殺す。」

手に汗にぎり、先生の話をきいたもめだが、寺嶋大學は
 まさにこの四郎忠常の再来だと云えよう。実に養れぬこ
 どおつた。

さてこの寺嶋大學は堅田、上城、派谷の住人で、現在

寺嶋佐水氏の先祖である。寺嶋氏の語るところでは、も
 と北國越後の人で、修行のため諸国を巡り、当地に住み
 付いた山伏であつたと語り伝えられてゐること、惟
 教の家来として知られてゐるところを見ると、相当地に
 た人物であつたと思われる。

山伏で越後の人と寸代は羽黒山伏であつたのではあ
 るまいか。修験道の成立したのには中世初期で、山岳信仰の
 一形態として、名のある山岳に登拝修行して呪力を獲得す
 るのであるが、それと密教の呪験修行が習合して、大和
 大峯山根本道場が出来、後天台系の密教を旨とする聖護
 院に属する派と、真言集の密教を旨とする三寶院に属す
 る派との両派があり、十四世紀以後から組織を整えてきた。
 頭髪を蓄え、淨衣を着て、刀をさすというふなりをして
 いた。中世末には出羽三山（羽黒山、月山、湯殿山）の山伏
 が現れ、熊野三山、大山、出雲の熊淵、日の御崎、石槌、
 叡山、信州戸隠、富士山等、九州では彦山の山伏が有名
 である。

東北地方修験道の根拠地は何と云つても羽黒山で、現
 在は羽黒三山神社がその信仰を支配してゐる。羽黒山の
 歴史は推古天皇元年（五九三年）に始まると云われ、崇峻
 天皇第一の皇子、皇子皇子が出羽田由良海岸に上陸し、
 三年足つ鳥に導かれて羽黒山の阿古谷に入り修行し、終
 に羽黒三山を創りたむかその始まりと伝えられてゐる。
 山伏はいずれも密教呪法に通じ、精進潔斎、茶籠奉幣
 の神道儀礼をも行い、寸々北を祈禱、呪者として、当
 時の庶民、地方武士の崇敬をうけてゐた。寺嶋大學は認
 められて佐伯惟教に從ひ、堅田三十六士の一人に教えら
 れる者となつてゐたのであつた。

時は天正十四年戊戌の十一月三日、島津の大將土持次

即ち郎親信、新名治左衛門尉親秀、島津中書の率いる軍勢凡そ二千餘の薩州日州の勢は、佐伯大越峠に陣を取り、四日早朝一隊は岸河内に放火し、本隊は普坂峠を越えて西野長池に本陣を取り、先鋒は沙月に進出、大越川にそつて陣を取る。

こゝに時佐伯勢は、山田匡徳を軍師として三段の陣を取り、第一陣は城ハ橋より沙月へ、さかおとして打つて出て、さんくんに敵をたたく、第二陣はこれに続いて征め寄せ、敵を江頭、混谷方面にはしらせ、長池へと追う。第三陣は宇山城におり合圍を待つ。山田匡徳は堅田三十八人の勇士をつれ、浮武者、今で言う機動隊を組織して波越峠(混谷より波越へ起る峠)に居て戦況を見る。頃且よしと狼烟を挙げれば、宇山城の三陣は長池口へとせよとせる。波越峠の浮武者が横銃を入れて先を取り切るうとする。敵もさる者、西野の在家に引いたが、取つて返し戦うては引く、佐伯勢の勢に押されて、ついに府坂の在家まで引き取る。

島津勢がこのまゝ黒沢方面へ走ると、匡徳の策略にそごを来たす。さすが匡徳、万一の場合の備えとすてに打つてあつた。大友興廢記に云う。

「本より匡徳浮武者にて波越の峠に居て、敵府坂に引ば幸なり。若黒沢道ばかり、日州三河内へ強ひ岸河内は控へたる相國違はんと思ひ、時に至つての事なれば、軍兵のし物と少々集め、鼻紙などを取合せ、角取紙はれんを拵へ、又波越へ観音堂(常樂寺)に入て、御帳の新敷白布と拝借して、まが尋段々壞の文を頼母敷観念し、さし物と拵え、何れもしばり足懸銃炮四五挺、波越の山際を通り、竹角口に出し、在家の物がが藁の見越しに立置き、金風はひらめかし、敵普坂まで引来たらば銃砲を鳴らし、狼烟を上

げ貝を吹けと相國を示し置く」

匡徳は兼て相國の銃砲を竹角口にならして狼烟を挙げたので、今か今かと待つ竹角路、一せいに銃砲、貝、狼烟、ときの声と、大軍のあり知くに見せかける。薩軍はこゝにも大勢の佐伯軍ありと見て退路を変えて、普坂峠に差かかると、府坂峠の敵は佐伯軍の本隊と岸河内を別動隊が、薩軍二千を挟んでの追撃戦であつた。薩州、日州軍は一いに千人原に追ひ込まれ、大越方面へ逃走するといふ、佐伯大勝の戦争であつた。

さてその竹角口でホラ貝を吹いたのが寺島大守であつたといふ。ホラ貝の名手であり、よく響くホラ貝であつたといふことである。

寺島家はほホラ貝も刀も伝つていたと云うが、或る時熊本の山伏がそのホラ貝の音色にほれこみ、一時借りて持ち出しをが、そのまゝ返して来なかつた。刀の方を紛失して今はないといふこと、まことに惜しいことである(草)

① さし物(指物)

昔鎧の背の指筒にさし、又且従者は持たせた小旗、飾り物。

② ばれん(馬鹿)

紙及び草を細長く裁つて、まといに垂れさせたもの

③ 刀尋段々壞(とうとんぜんえん)

観世音菩薩普門品偈に「或遭王難若臨刑欲奔終念彼観音力刀尋段々壞」とあり、

或は王難の苦に遭い、刑に臨んで壽終らんと欲せんにも、彼の観音の方を念ずれば、刀尋で段々に折れんとすの意。

其間尋段々壞、(新編武蔵野傳)に「堅田親相河内」云々